



「どんな子どもも同じチャンスがある社会をつくる」

兵庫県立北須磨高等学校 2年 萬谷 美里

早朝、ビエンチャンは鮮やかなオレンジ色に染まっていた。ラオスには毎朝、お坊さんが鉢を持って街を歩き、地元の方々がご飯やお金などを分け合う托鉢という素敵な文化がある。その托鉢を見ていて、1つ疑問に思ったことがあった。

「なんで小学生くらいの小さい子どもたちがお坊さんとして修業しているのだろう」

ホストマザーに聞いてみると、「子どものお坊さんの中には両親を失い、お寺で生活や勉強している子もいる。さらに、そういった子どもたちは就職困難に陥りやすい傾向にあるんだよ。」と教えてくれた。孤児になりお寺で生活した子どもたちは将来を生きる上で様々な難しい状況に直面することを知り、衝撃を受けた。また困難な事情がある子どもたちが自立できるように、平等に教育を受けることの必要性を感じた。しかしその一方で、私の中である葛藤がある。既存の修行文化を尊重するためには、私たちが教育を啓発することは単なる押し付けなのではないかと思った。私たちがどのようにして現地の文化と向き合い、国際協力として関わっていくのかを考えさせられた。

ラオス人の“支え合う精神”を象徴する托鉢の魅力を伝え続けていくためにも、これから教育と文化について学び、いつかどんな境遇にある子どもも同じチャンスがある社会をつくりたい。